

環境 (2)(原発問題)

原発再稼働の社会構造…学術会議と構成する学会会員の実態から見える原子力社会構造

Miyauchi Institute of Social-ty・瀋陽師範学院・宮内紀靖
2016/10/ 於・九州大

I はじめに

福島原発事故の収束に殆んど手も付けられていない今、原発の再稼働が密やかに謀られている。本稿では再稼働の事態が進行しつつあるその実態を、推進側の組織とその行動から、原子力社会の政治権力構造を解明することを目的とする。

II 解明の方法

原子力推進の構造の中の、学術・広報・社会教育の面を政治権力と絡めて解明する。その為に学術会議の広報・教育活動としての『サイエンスカフェ』を事例研究する。其処に関わる第一部の『脱原発派』と、第三部の『原発推進派』との暗闘と、政府組織の事務局の意向をも考察する。

III 2015/3/27(金)19:00-20:30 に開催された『サイエンスカフェ』

2015/3/24 の時点で(前日午後)30名定員中の27番目の申込で出席可能と回答された。主催は学術会議(事務局は広報課)という事であったが、実際は第三部の連携会員である柴田徳氏氏の主催による、原発再稼働を推進したいという講演会であった。

IV 柴田徳思という人物とその役割

柴田氏は著書などに記載されてない若年時代の履歴が分からなかった。苦労し調べた結果 1941年生れ、1957年頃東京都立荻窪高校(旧女学校系)入学 1960年頃卒業。1961年千葉大学文理学部入学 1965年卒業が柴田氏研究者履歴に欠如の履歴である。1965年阪大物理研究科入学 1970/12博士課程修了。1970/12阪大理学部助手。1977/12同講師。1980同助教授。1987東大工学部教授。1997より高エネルギー加速器研究機構教授。その後原子力関連財団の研究員や役員を歴任し、所謂『御用学者』ボスの一人となった人物。その役割は、原発再稼働と放射線の恐怖を薄め政府資源エネルギー庁の手先となり、学術会議連携会員で学術会議を原子力エネルギー政策の中心にする活動中である。

V 長谷川公一氏の役割

学術会議特任連携会員で脱原子力派の論客として、反原発派からも原発推進派からも便利に利用される環境社会学者。東京大学文学部卒業、同大学院修了、東北大学教授。

VI 『サイエンスカフェ』の歴史と日本の現実

その歴史は17~8世紀仏の貴族の邸宅での『サロン』と1992年にパリで始まった『哲学カフェ』にヒントを得て、1998年に英国リーズで一般市民により始められた。日本でその名称は踏襲されたが、『サロン』性やカフェ雰囲気のない官製の講演会である。

VII 結論

専門家が一般人を原発再稼働という隠された方向に誘導し『核燃料サイクル』が存在する方向も有るかのように思わせる、巧みな広報・宣伝・社会教育となっている。